

# マルチレベル分析による アクティブ・ラーニング型授業の効果測定 (9) —グループ目標が大学環境に対する適応感に及ぼす影響—

○佐藤友美 (九州工業大学)  
杉本英晴 (駿河台大学)

高比良美詠子 (立正大学)

キーワード: アクティブ・ラーニング, 大学適応感, マルチレベル分析

## 問題と目的

近年, 対話を重視したグループワークといった, アクティブ・ラーニング型授業が教育現場において積極的に導入されてきている。グループワークのような協同学習は, 競争学習や個別学習に比べ, 心理的適応や大学への態度などの改善において優れているという (Johnson et al., 1998)。しかしグループワークの効果, すなわち汎用的技能・態度, そして知識の定着・活用の促進については, 実証的な検討は少ない。

そこで佐藤他 (2016) は, 大学でのグループワーク中の発言活動と協同活動が, 汎用的態度の中でも適応感に及ぼす集団レベルおよび個人レベルの効果を, マルチレベル構造方程式モデリングを用いて検討した。その結果, 発言活動は個人志向の適応を促進し, 他者志向の適応を阻害することが明らかになった。さらに, 協同活動は個人志向の適応を阻害し, 他者志向の適応を促進することが分かり, グループ活動の質によって効果のトレードオフがみられることが示された (杉本・佐藤, 2017)。

しかし, アクティブ・ラーニング型授業の効果を決める要因としては, 発言活動や協同活動といった授業内に実際に生じたグループワークの活動内容に加え, 当該のグループ活動に対する個人の認識も影響する可能性がある。

そこで本研究では, 所属グループにおける目標が大学適応感に及ぼす影響を, 個人レベルと集団レベルの効果を分離できるマルチレベル構造方程式モデリングによって検討する。

## 方法

**調査対象者** 4 年制大学の心理学科のアクティブ・ラーニング型授業を履修した 199 名 (女性 73 名, 男性 126 名)。授業は, 1 年次の必修授業として全 15 回行なわれた。授業では, オリジナルの心理尺度を作成する課題を, 5~8 名の固定メンバーから成る 32 グループで実施した

**質問紙** (1) 当該グループにおける目標: パフォーマンス目標 (例, 「よい成績を取りたいと思っていた」), メンテナンス目標 (例, 「グループの雰囲気をよくしようと努力した」) を測定する 5 件法の尺度を作成した。(2) 大学への適応感: 大久保・青柳 (2003) の大学環境への適応感尺度 29 項目から, 「居心地の良さの感覚」「被信頼感・受容感」「課

題・目的の存在」「拒絶感のなさ」の 4 因子を使用した。

**手続き** (1) は第 15 回授業終了時, (2) は第 1 回授業開始前 (事前) と第 15 回授業終了時 (事後) に測定した。本研究の手続きは, 調査実施校の倫理委員会の審査を受け承認された (承認番号 290076)。

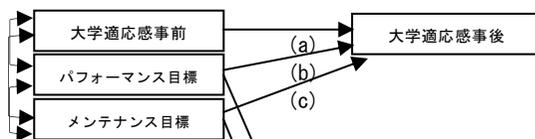
## 結果と考察

Figure 1 の分析モデルを使用した。2 種類のグループ目標得点の級内相関係数はそれぞれ .02 と .14 であり, 説明変数は全体平均による中心化を行った。集団レベルのパス (a~c) のパスはいずれも有意ではなく, 集団レベルでは, 2 つのグループ目標から, 大学適応感への影響は見られなかった。

個人レベル (f~h) では, 一部に有意なパスが見られた。パス (f) については, 4 因子の全てで有意な正の効果が得られ, 事前の適応感が高い人ほど事後の適応感も高かった。パス (g) については, 課題・目的の存在で有意傾向の正の効果が見られ, グループ活動においてパフォーマンス目標を強く意識していた個人ほど, 事後の課題・目的の存在が高い傾向があった。一方, パス (h) については, 居心地の良さで有意な正の効果が見られ, グループ活動においてメンテナンス目標を強く意識していた個人ほど事後の居心地の良さが高かった。なお, グループ全体での目標の共有は, 個人レベルのパス (f) の強さに影響していなかった (パス d, e)。

これらのことから, 個人のグループ活動における目標の持ち方によって, 大学への適応感に及ぼす影響が異なることが示された。

### 【集団レベル】



### 【個人レベル】

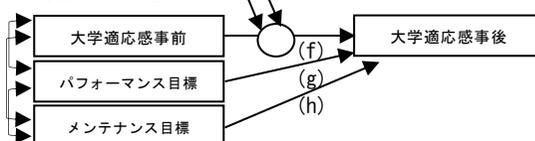


Figure 1 分析モデル (誤差項は省略)。